

子育て家庭がアートとつながるプラットフォーム作りに向けた実践研究

浜松学院大学短期大学部 北本ゼミ

協力ゼミ：永岡ゼミ

指導教員：助教 北本遼太

参加学生：赤堀志夢，加藤 恵，佐原 萌
長田来瞳，角皆愛海，中村理乃

1 要約

本研究では、子育て家庭への支援としてアーティストと子ども・保護者が地域の文化施設を探検する「おさんぽワークショップ」を行なった。このワークショップを通して、「いつもと違った視点で見ること」を実践するアートを使うことで、保護者の知っているつもりだった施設や場所の新しい見え方を創り出すことというアートの持つ子育て支援における意味が明らかとなった。

2 研究の目的

地域社会の空洞化に起因する子育て家庭の孤立の問題が指摘されている。このような状況に対して、保育所保育指針の中では、子育て家庭への支援にあたって保育士と地域の社会資源との連携の必要性が指摘されている。このため、保育者養成校である本学のゼミ活動として地域の社会資源とつながるワークショップを企画・実施することは、地域貢献活動として重要な意義を持つと考えられる。特に本研究では、子育て家庭とアートをつなげることを行なう。具体的には、地域の文化振興財団-アーティスト-大学の3者が共同し、子育て家庭がアートを経験するワークショップを実施する。このワークショップの実施を通して、子育て支援においてアートの持つ意味の一端を明らかにすることを目指す。

3 研究の内容

以上の目的のために、公益財団法人浜松市文化振興財団の協力のもと、浜北文化センターを会場にしたワークショップを実施した。また、ワークショップの実施のために齋正弘氏を招聘し、ワークショップの内容や実際に関する打合せへの参加とワークショップ当日のファシリテーターを依頼した。齋氏は、宮城県美術館にて30年以上にわたり公立美術館での教育普及活動を行ってきた。この活動の1つとして、「美術館探検」がある。これは「(子どもたちとともに)美術館の通路にある扉を、怒られながら、又は怒られないように、次々と開けて見ていく。見えた物に、驚いて見る。見える物だけでなく、見えない物にも、目を配ってみる。見えない物だけで、見えることを実験してみる。(齋, 2011, pp39-40)」活動である。すなわち、日常を様々な目線から見てみることを通して、新しい物の見え方を展開させるアート活動である。

(1) ワークショップの企画と運営

アートワークショップを浜松市浜北区で実施するためにワークショップの具体的な内容を決める打合せを実施した。この打合せでは、齋氏がこれまで実施してきたワークショップの考え方及びその実際を体験してみることや浜北文化センター及び浜北区の現況についての情報共有が行なわれた。打合せには、齋正弘氏、浜北文化センターの職員である塩崎富弘氏、北本ゼミ・永岡ゼミの教員及び学生が参加した。

(2) ワークショップ参加者への調査

本研究で実施するワークショップの子育て支援としての意味を明らかにするために、ワークショップに参加した保護者に対して、ワークショップ中の聞き取り調査及びgoogle formを用いたアンケート調査を実施した。聞き取り調査の内容は、「活動中の子どもの様子について普段とどのように違って見えるか?」「齋氏と子どもの関わり方についてどう思うか?」「浜北文化センターは利用するのか?利用する場合どんな時に利用するのか?今回の利用の仕方は普段とどう違うのか?」「なぜ今回このワークショップに参加しようと思ったのか?」「子育て支援のワークショップについて参加した経験はこれまでであるのか?ある場合はどんな内容のワークショップだったのか?」といった質問項目を事前に準備し、ワークショップの進行の妨げにならないように配慮しながら聞き取りを行なった。アンケート調査では、ワークショップへの参加理由、ワークショップを通じた新しい発見、子育て支援のワークショップへの参加経験、今後のワークショップについての要望、現在の居住地について尋ねた。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

2021年

8月20日（金）ゼミ学生及び教員での事前打ち合わせ

8月22日（日）第一回打合せ

8月23日（月）ゼミ学生での打合せの振り返り

9月18日（土）及び19日（日）第二回打合せ

11月27日（日）ワークショップ実施

12月～2022年1月 ワークショップの関係者への調査及び結果のまとめ

(2) 実際の内容とその理由

B（一部修正）：修正した部分は、打合せは全二回を予定していたが、第三回目の打合せを行なった点である。この理由として、予定していた打合せ時間内ではワークショップの具体的な内容が決まらず追加の打合せ時間が必要となったためである。

各打合せ及びワークショップの実際の内容については以下のとおりである。

第一回打合せ

参加者：齋氏（オンライン参加）、塩崎氏、ゼミ学生5名（内永岡ゼミの学生が2名）、教員2名（北本、永岡）

会場：浜北文化センター会議室

日時：8月22日（日） 15時から17時

内容：自己紹介及び企画趣旨の確認を行なった。その上で企画の具体案について話し合うためにブレインストーミングを行なった。ブレインストーミングのテーマとして「どんな子育て家庭支援ができそうなのか？」「みんながどういうことをやってきたのか？」を設定した。ブレインストーミングを通して出たアイディアに対して、オンラインで参加した齋氏からアーティストとしての立場からコメントをもらった。コメントの内容は、「出てきたアイディアが自分たち（大人たち・支援する側の人たち）がやりたいことを話しているように見える。そうしたことをやっても参加者は楽しめないことが多い。むしろ朝起きるとか服を着るといった本能的・原点的な活動が面白いこと、本能的・原点的な活動を面白がることを子育て中の父母が出来ること1人で子どもと向き合っている面白いのではないか」というものであった。またこの原点的な面白さの思いつき出し方として、「目的を決めずに子どもが注目することに驚きながら一緒にお散歩をしてみる」というこれまでの齋氏の経験が共有された。

第二回打合せ

参加者：齋氏、塩崎氏、ゼミ学生2名、教員2名

会場：浜北文化センター及び美蘭中央公園周辺の散策

日時：9月18日（土） 15時から17時及び9月19日（日） 12時半から17時

内容（9月18日）：浜北文化センター及び浜北区の現況について、塩崎氏から説明をしてもらった。親子での文化センターの利用として、乳幼児とその保護者向けのコンサートやワークショップを文化センターとして企画しており毎回ほぼ定員まで埋まっていること、そのほかにもママ会などで市民サークルとしての利用が行なわれていることを教えてもらった。また、文化センターの課題として、美術館や博物館といった文化施設が浜松市中心部に集中しており、文化センターとして浜北区の人々がそうした文化施設に行ってみたくてくれる経験を提供したいことや、若者（10代、20代）の施設利用率が低いことを教えてもらった。

またワークショップの内容についての話し合いが行われた。この話し合いでは、美術は「見ること」であり、モノや風景の見方を変えることであるが、そのためにはある程度の余裕が必要となる。しかしながら、子育ての時期は一般的に余裕がないと言われており、どのように余裕を持つことが出来るのかを考えなければならないといったことが話された。また、齋氏から、18日の打合せの前に、浜北文化センター近くにある美蘭中央公園を散策し、様々な発見があったことが共有された。ここから実際に齋氏とともに散策をして、彼の言う「見ること」を学生、教員が体験したうえでワークショップの内容を考えることとなった。

内容（9月19日）：12時半から15時に美蘭中央公園周辺および浜北文化センター北館の散策を行なった。この散策を通して、ツリーハウスが出来そうな木を見つけるという視点で公園内の木を見てみること、映画「となりのトトロ」のトトロが出てきそうな植え込みを見つけてみること、通気口の位置に注目しながら空気の流れを考えてみるという視点で文化センターの設備を見てみることなど、日常をいつもとは違った視点から見てみることを体験した。



写真1 御園中央公園内の散策の様子



写真2 御園中央公園内の散策の様子



写真3 浜北文化センター内の散策の様子

散策の後にワークショップ案についての話し合いが行われた。散策での経験をもとに、文化センター周辺を散策する案や本能的な活動である「寝ること」をテーマに文化センターを見てみる活動といった案が出た。「寝る」をテーマに文化センターの見方が変わるようなワークショップの内容をゼミ学生及び教員で考え、その内容について齋氏と塩崎氏から意見をもらいながらワークショップの具体案を組み立てていくという今後の方向性が決まった。

第三回打合せ

参加者：齋氏、教員2名（北本、永岡）。なお平日で予定外の開催であり学生及び塩崎氏の参加が困難であったため、それぞれのアイディアを事前に共有したうえで教員と齋氏のみで打合せを行なった。

日時：10月19日（火） 16時半から18時

会場：オンライン開催

内容：ワークショップの具体案と広報のためのチラシの内容を決定した。前回の打合せから「寝る」をテーマにゼミ学生を中心に具体案を考えてきたが、学生の提案する案が子どもではなく学生（大人）がやりたいことになってしまっている点、ファシリテーターとして参加者と初対面の状態でこれまでやったことない「寝る」というテーマでワークショップを行なうことは難しい点が齋氏から指摘された。このため「寝る」というテーマでワークショップを組み立てることが難しいと判断し、別案として出ていた文化センターとその周辺を散策する案でワークショップを行なうことが決まった。その上でワークショップのテーマを「日常と非日常をつなげる一つながる？：おさんぼ（ほんとの…） さいじいといっしょに！！」として、浜北文化センター内の施設を探検しつつ、傍にある神社を経由した散歩を親子とともに行なうことが決まった。

ワークショップ

参加者（運営側）：齋氏、塩崎氏、文化センター職員1名、ゼミ学生6名、教員2名

参加者：5組の親子。内訳は保護者6名 子ども7名 計13名であった。子どもの年齢の内訳は、2歳児が2名、3歳児が1名、4歳児が1名、5歳児が2名、小学2年生が1名であった。なお事前の申込みは7組であった。

日時：11月27日（土） 10時から11時半

会場：浜北文化センター北館1階展示コーナーにて集合。

当日の流れ：ワークショップの運営側は9時に集合し、役割分担を確認した。10時からワークショップが始まった。開始とともに齋氏からこのワークショップで行なう散歩は美術鑑賞のはじまりであるといったことが参加者に向けて解説された。その後、文化センターの内外を散歩しながら、排水溝や搬入口といった施設を子どもの目線で見つめる、文化センターに飾られている絵画や銅像の解説、文化センター駐車場の植え込みに入って遊んでみる、文化センター隣の神社の軒下をのぞいたり石垣に登ってみる等をしながら、文化センターを違った視点から見ることを行なった。その後、集合場所である展示コーナーに戻り、ワークショップの解説が行なわれ、終了した。ワークショップ終了後、齋氏、塩崎氏、ゼミ学生、教員での振り返りを行なった。



写真4 おさんぼワークショップの様子
文化センター横の階段



写真5 おさんぼワークショップの様子
文化センター隣の神社



写真6 おさんぼワークショップの様子
文化センター正面の生垣

(3) 実績・成果と課題

本研究の実績及び成果について、アンケート結果及び聞き取り調査のフィールドノートをもとに述べる。なお、アンケートは参加した6組のうち4組から回答が得られた。

まず、「今回のワークショップを通して浜北文化センターやその周辺についてどのような新しい発見がありましたか？」という質問項目については、「周辺の神社などは、特段珍しいものではないが、普段なら見逃していた草花などに関心を持った。」「普段行かない場所(施設の裏や狭い場所)で子ども目線だと興味があるものがたくさんある。」「普段目にとめない所に焦点を置いて歩くこと。(パイプ、側溝の中、石垣などなど)」「文化センターを子どもの遊び場だとは認識していなかったため、正面の植え込みのところなど、子どもがおもしろがれる場所があることが発見だった。普段遊ばせてよいかどうかは別として。」という回答が得られた。このように本研究で実施したアートワークショップを通して、普段なら目にとめない・認識していない場所が持つ社会資源としての有用性が引き出されたと考えられる。すなわち、ワークショップを通してアーティストと親子が歩くことで、文化センターや神社にある何気ない物に対して子どもの遊び場として利用可能な資源という意味を新たに創造していたといえる。このように子育て支援において社会資源とつながることは、保護者が知らない社会資源に関する情報提供だけでなく、保護者の知っているつもりだった施設や場所の新しい見え方を創り出すことだと考えられる。そして、その新たな見方の創造において、「いつもと違った視点で見ること」を実践するアートワークショップは有用であろう。このような子育て支援におけるアートの意味を確認できたことが本研究の成果である。

加えて、保護者への聞き取り調査の中で、ワークショップに参加した理由として、「コロナ禍で外出する機会が限られており、文化センターの近くに住んでいたのが来たことはなかったので参加した」という旨の回答が得られた。このように、ワークショップがコロナ禍によるステイホームを強いられる子育て家庭の外出の機会として機能していたことは一定の成果であるといえる。しかしながらそれ以上に、先述の子育て支援としてのアートの意味を考慮すれば、家庭外の社会資源とのつながりを作るだけでなく、家庭の中にある日常について新たな意味や可能性を創り出すという子育て支援のアプローチを見出すことができる。

(4) 今後の改善点や対策

今後の改善点として、本研究のワークショップでは、5組(計13名)の親子が参加したが、「いつもと違った視点で見ること」というアートの実践を普及するためには、継続的に・より多くの人々に対してこの種の活動を行なう必要がある。このためにはアーティストとの継続的な交流を行なうための経済的・設備的な基盤を作ることが必要だと考えられる。

5 地域への提言

本研究を通して、既知の社会資源の新たな見え方を引き出す実践というアートが持つ意味を子育て支援においても確認した。本研究では県外のアーティストにワークショップのファシリテートを依頼した。先述した今後の改善点を踏まえれば、継続的にアーティストを招く基盤を作ることと共に、地域の文化施設においてこのようなアート活動を組織できるような人材を配置することも提案できる。また、地域の保育を担う保育者養成校に対しても、より多様な子育て支援の在り方を拓くために、アート活動の組織を学生が学ぶ機会を作ることが必要だといえる。

6 地域からの評価

浜北文化センター職員の塩崎富弘氏から以下の通りの評価をいただいた。

ワークショップで最も印象的だったことは子どもたちの様子である。特別なもの、特別な風景があるとは思えないコースの中、子どもたちは飽きることなく、主体的に動いていた。「さんぽ」というよりも「遊び」の時間であるように見えた。実践を通してファシリテーターとしての齋氏の姿を見ることができたことは貴重な学びであった。

今回、齋氏によるワークショップを貸館がメインである文化施設において行ったことに大きな意義を感じている。地域には、美術館や博物館は身近になくても、文化センターなどの文化施設は生活圏にあることが多い。だとすると、子育て世代がアートとつながる環境づくりにおいて、当館のような文化施設の役割が重要になってくるのではないだろうか。施設だけでなく、歴史、周辺の建物、自然も見方によってはアートとつながる社会資源であることを再認識できたことが本研究の成果の一つであったと考える。

引用：齋正弘(2011)『大きな羊のみつけかた―「使える」美術の話―』仙台文庫。